健常者と障がい者の壁がない世界へ

南アルプス市立若草中学校三年　　佐々木　瑠愛

皆さんは、聴覚障がいという言葉を知っていますか？私のいとこも難聴という障がいを持っています。難聴とは耳に音が入ってから脳に伝わるまでのどこかの段階で障がいが起こり音が聞こえなくなったり、全く聞こえなくなる障がいです。私のいとこは補聴器をつけることで会話することができ、日常的に補聴器をつけています。ですが補聴器をはずすとほとんど会話が出来ません。補聴器をつけていても人がたくさんいる場所やうるさい場所、例えばお祭りや遊園地などだと補聴器は、聞きたい声だけでなく、すべての音を拾ってしまうので、うまく会話ができません。ほかにも耳が聞こえない、聞こえにくい人は読唇術という話し手の口の形を理解する技術を持っている人が多いです。ですが新型コロナウイルスの感染者が急激に増えている今、人と会う時にはマスクを着用しています。そのため外に出たときに相手の言葉を理解することが非常に難しくなっています。このようなことを説明すると難聴者は大変そうと思うかもしれません。ですが皆さんと同じように学校に通っています。他にも聴覚障がい者という言葉を聞くと、可哀想などという言葉を耳にします。障がい者は可哀想なのでしょうか？私はそうは思いません。障がいを持っていても同じように学校に行って勉強して、同じように遊んでいたり、同じような生活を送っています。ですが私たちは、健常者と障がい者の壁を作っているように気がします。

これは、私が小学六年生のときに体験した話です。私は、映画を見にイオンモールに行っていました。私は、映画を見終わって帰ろうとしたとき、少し前からずっと私より下に見える小さな女の子が周りをキョロキョロ見渡しながらうろうろしていることに気がつきました。初めはスルーしようと思いましたが、小さな子どもが一人でうろうろしているので心配になって声をかけてみても振り返らずうろうろし続けました。でも私は心配なので肩をトントンして声を掛けてみると女の子の耳に補聴器をしていることに気付きました。私に気付いた女の子は、手話を使いながら私に話しかけてくれました。ですが、私はあいさつ程度の手話しか出来ず、何を伝えたいのか全く分かりませんでした。近くに女の子の親も見当たりません。どうしたらいいのか分からず、近くの店員さんに助けてもらいました。私はその女の子がなにを言いたかったのか、その後ど

うなったのか、いまだに分かりません。その時私はなにもできず申し訳ない気持ちと、悔しい気持ちでいっぱいでした。ですが最近こんなニュースを目にしました。
「聞こえづらくても誰もが会話しやすい社会へ。」この文のように耳が聞こえにくい人、またどんな障がいを持っている人も同じ人間であること、人権があるということを忘れてはいけないと思います。私は、聞こえづらくても会話しやすい社会にするためには、障がいに対する私たちの意識を変えていく必要があると思います。私はよく、障がい者だからこれは出来ないなど障がい者だからという理由だけで夢を叶えることができなかったり、やりたいことが出来ないという話を耳にします。今すぐには難しいかもしれませんが、少しずつでも健常者と障がい者との壁が無くなり、同じように会話するなど、いろいろなことができるようになればいいなと願っています。障がい者をサポートしていくために私たちにもできることがあると思います。例えば、話すときには、はっきり口を動かして話すことや、身振り手振りを使うなどをすることで相手にも伝わりやすくなると思います。障がい者の全てをサポートするのではなく、まず、自分にできることを一歩ずつ始めていきたいです。障がい者の悩みとして、助けてほしいときに相手が迷惑だったらどうしようなどを遠慮して、助けてくださいという一言を掛けられないということが多いそうです。ですが私は、遠慮なく助け合いができる世界、健常者と障がい者の壁がない世界、聞こえづらくても会話しやすい世界を作っていきたいです。